天不得以生育萬物。有靈焉。何奪吾春山君之速也。余與君交有年於茲。審知君之爲人。君性温厚篤實。交友以信。報怨以德。婉兮其容。温兮其貌。宛然有君子之風。蓋君夙聞聖人之道。而志于學。其志在仕進也。孜々矻々。燭以繼晷。徐期他年之大成。人皆刮目。而待君榮達。嗟乎。以君之德尙人。小人之德或以可偃風。以君之學施于世。紛糾之政或可以使就緒。誰謂君才以二十餘之青齡。一朝感金風。與由布山頭木葉飄零。儻所謂天者。眞無靈耶。抑天有靈而不欲祉我國耶。何奪吾春山君之速也。孔子曰。朝聞道。夕死可也。如君。謂之聞道。豈不可哉。余雖爲天下不得不惜君死。君亦可以瞑矣。吾儕小人。雖志于道。道未得聞。雖就于學。學未成。私心忸怩。有愧于君也。三更夢驚。起開窓戸。明月在天。四無人聲。遙聞滔々白川之水聲。瀏喨不絕。使余徒羨長江之無窮。想故友之情益切。噫哀矣哉。

笠間梧園評　結末餘音嫋々文思亦瀏喨不絕。

翻譯

「鐘は今晩鳴てはならぬ」　四　瞑軒

英吉利の太陽は徐に小足を早めて、小山の頂上を踰へて隱れ行く。四邊の景色は左も美麗で、そうして憂き一日の終りと次第次第に近いて來る。そうして其一番終と

の光線が、一個の情夫と、一個の乙女の額を接吻しさ時には、情夫は歩調も靜に疲れ果て、乙女は頭髪もやつれ、併ゑつやゝかに、情夫は始終頭を低れて、悲しろふに考へてばゝり、乙女と唇の色は何處へか失つたと見へ、濃き紫の色に其位置を占められて居る。ろうして云ふともなく、云はぬともなく、始終つぶやく、

「鐘は今晩鳴てとならぬよ」

「老翁よ」

別しいの紫の唇がぞもり出した、古き獄舍を指して――其獄舍の上には小高き、嚴めかしい小塔か突き立て居て、其獄舍の周圍には薄暗き、濕氣有る、寒むろふな壁か取卷いて居る。

「妾は其獄舍の中に情夫を持つ。其れが死罪の宣告を受々て、鐘の響と同時に死刑に行はれる。夫れに、サー、モー、此世では仕樣もない、……呉ろむろへるはとても日沒迄はむつゝしかろう。」

唇は奇妙に動て紫の色は愈濃くなる。ろうしていろがはしき呼吸の中に、微聲の語音か出入する、

「鐘は今晩鳴てはならぬよ。」

「別しいよ」

老翁か徐に話し出す。其の話す言葉の中には、無數の弓の矢、無數の毒槍を含んで居て、一々乙女の胸底を刺した。

「永ひ永ひ間、愚老と其の慘憺しき、暗黑なる塔うち鐘を打つた、打度日暮にろうして公衆に薄明を知らゑた。

愚老は是迄義務を遂げたよ、間違もなく正しく。今と年も暮れた、猶は爲さねばならぬ……鐘は今晩鳴らねばならぬ」

乙女の目の玉はまるで日中の猫の目れ如く、容貞は荒野の蓬の樣で、双の三日月と疑はるたる眉さへ、何時か荒波の涙と變して、其上色迄青く見へた。

ろふして其秘密の胸の底にと、決心の猛將が誓の旗を守て居る。おせなれば別ゑいは前かゞ裁判官か一粒の涙も垂れず、又一呼の嘆聲さへ出ださずに宣告文を讀み渡したのを聽いた——「鐘の鳴る時を以て馬しる、安だーうーゞは死に處す可きものなり。」

乙女の呼吸は絶なんとするばかり喘く。乙女の目は瓌璃にリスリンを注いだのかと疑はれる程輝ひて大きく見ゆる。ろふして底調子にてつぶやく、

「鐘は今晩鳴てはならぬ。」

上り坂を馳る兎の如く驅け出した。古寺の門へ飛び込む。そこで老翁は別しいの後から、幾度となく通ひなれたる小路を沿ふて來る。

別しいも一瞬の間も猶豫せず、其眞圓な目と、靑さめたる頰を以て、薄暗ひ塔に驅け登る、其塔にも釣鐘が懸つて居る。乙女は隙間の光線だも、顯はれたことなくて、只何年前よりかの塵が、積もに積て居る梯子の段を、上へ上へと登て行く。其の力にでもなりろふな隨伴は、紫の唇を突て不斷現れ出る、念佛ばかりだ、

「鐘は今晩鳴てはならぬよ。」

何時ともなく、梯子の頂上に達した。上にも大きな鳶色の釣鐘が、ぬつかと懸つて居て、今にも呑まろふな勢、下には暗澹と云ふ不祥の景色が、深さと廣さと、大さと、有樣とを、凡て秘密の中に入れて、これが地獄への通もと道りと疑はれる。して御覽な、其鐘の中央には、重ろふな舌がぶら〳〵としてさがりて居るが、其れが動き始める時分だ。乙女も光景に恐れて、暫しは胸を冷した有樣、呼吸も止まり、顏は眞靑。

が、どうだろう。別しいは其れを鳴らして置くだらふか。いや〳〵どの樣な事が有ても。今は別しいの瞳中に一種れ光線を放射して、暗中よ鼠をねらふ猫の身がまへ、一

散よ飛び掛つたが、釣鐘を一心にだきとめた、

「鐘は今晩鳴てはならぬ。」

別しいと釣鐘。市と一點の斜光の下に沈む。別しいと中天の仙女だ、釣鐘と共に振子の運動。

鐘突翁は打繩に手を掛けて一心に打たが、年老けて、耳聽からざれば、鐘の響を聞き分るに由なし。今にも年若き馬しるの葬式の鐘を打つかと心得て居る。が、まだ〳〵乙女は鐘を逃さず、しつかとだきとめて居た。ろふゑて濃紫な且つは震るへる唇で、裂くるばかりどきめく胸を勞て居る

「鐘は今晩鳴りはしないよ」

事はこれですんだ。鐘も振り止んだ。ろふして乙女も再びゑ暗き梯子の段を下へ下つた、——梯子、幾百年かの間人間の足跡が付けらゑた事のゑかつた梯子。

別しいが爲した此の勇敢なる行爲は、後々よゑつても、斜陽の美光が西天を色取る毎に、物語られるだらふ。年老た爺翁と長ひ顔をして、小供よ、鐘が其晩に鳴らなかつた事を告るだらふ。